柏市篠籠田・高田の歴史散歩

１．行程と日程

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会主催の篠籠田・高田の歴史散歩は、以下の行程と日程で行った。

今回のコース　（全体で約６km）

日程：２０１１年１０月２３日（日）
10 時から 12 時 40 分頃まで
行程：「三間」バス停　→篠籠田西光院　→高田熊野神社　→　野馬土手　→高田近隣センター　→（馬頭観音群）→松ヶ崎香取神社　→帰り（柏方面はバス停「香取台」など）

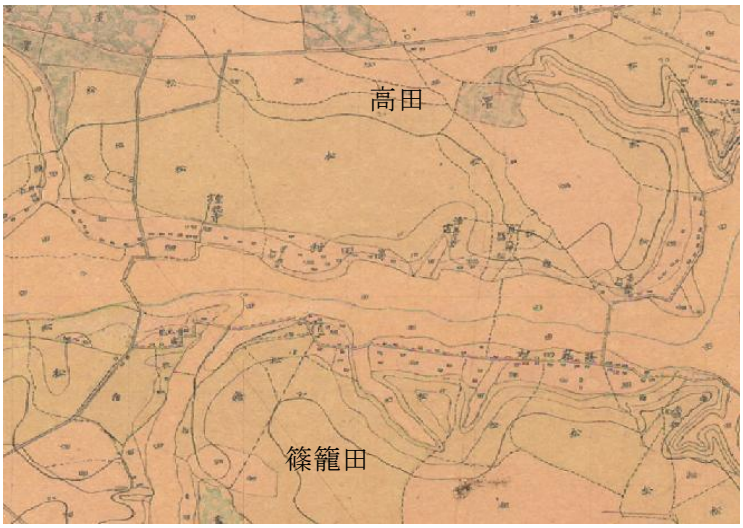
今回の行程は、篠籠田の西光院を振り出しに、北東へ高田の台地を上って熊野神社や、野馬土手などを見ながら進み、高田近隣センターで休憩後、東へ一旦大堀川沿いに出た後、松ヶ崎香取神社を見学して解散というものであった。

約 6km の行程で、台地を上ったり降りたり、ある程度高低差のあるコースである。しかし、春、秋の気候の良いときには、大木がある西光院の境内、高田の台地の緑や大堀川周辺の草花も楽しむことができ、快適なコースと言える。

もう少し歩ければ、篠籠田の地主神社に寄って見学することも出来たが、今回は見送った。今回の行程と重複するが、篠籠田の西光院から地主神社、高田の熊野神社に北上していくコースも考えられる。次回、同様の見学会を行なうときには、地主神社も含めて考えたい。

２．古代から開けた篠籠田

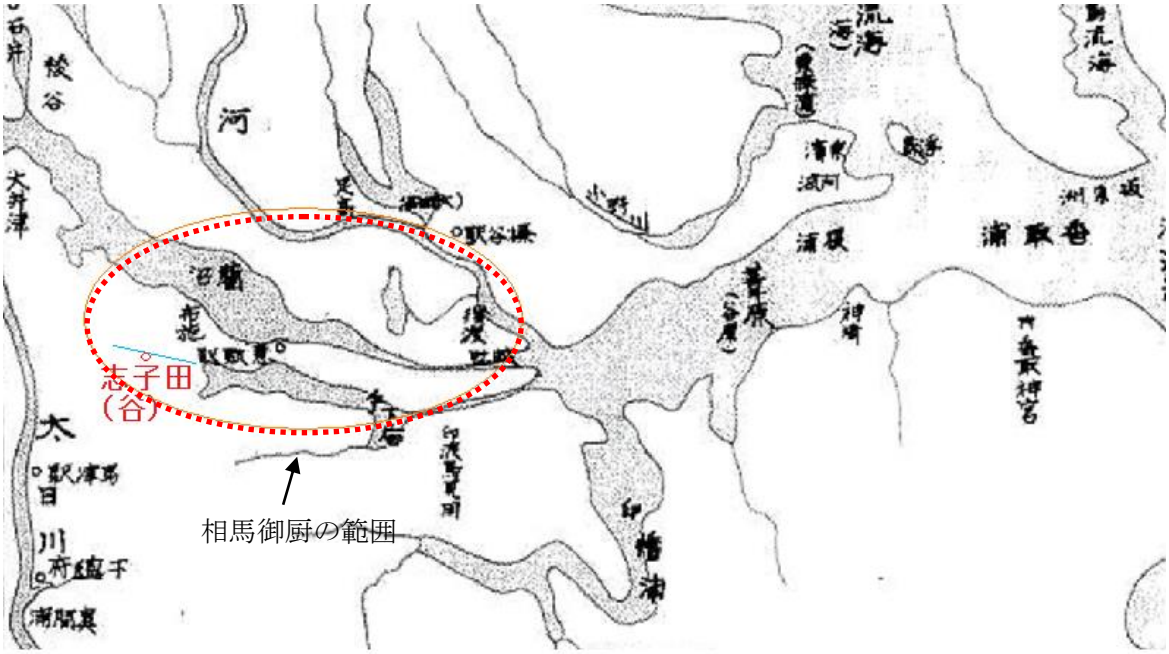
篠籠田は、手賀沼（手下水海）の西側にあって早くから開けた。次頁下図の「志子田」が平安時代の表記である。大堀川を挟んで、北は高田に隣接するが、大堀川の支谷が入り組む。以下の地図は、明治期の地形図であるが、確かに篠籠田には大堀川沿いの低地から分岐する大小の支谷が目立つ。



明治１３年当時の
篠籠田・高田
（陸軍迅速測図）

篠籠田は川の支谷による、
谷津田に富んだ場所であった

（吉田東伍著『利根治水論考』の「衣河流海古代（約千年）水脈想定図」に一部追記）



篠籠田は、前述のように古代から開けた場所で、柏市内で最も古い地域の一つである。
篠籠田の地名は、平安初期には、「志子田」と見える。これが、室町時代には「色陀」

となり、現在の標記になるのは近世、江戸時代からのようである。

「鏑矢伊勢方記」によれば、相馬郡に力をのばした千葉常重（常胤の父）が大治五年（1130）に下総国相馬郡布施郷を伊勢皇大神宮に寄進しており、それによって相馬御厨が成立した。長承4年(1135)、常重は相馬御厨の下司職を子息の常胤に譲ったが、相馬御厨に課せられた公田官物の未納を理由に、下総国司藤原親通によって常重は召し捕えられた。藤原親通は常重に相馬郷、立花郷（東庄）を親通に譲るという証文を書かせた。 さらに、源義朝は常重に圧力を加え御厨を奪い取り、天養2年（1145）伊勢内宮へ寄進してしまった。

これに対して常重の子常胤は、公田官物の未納分を国庫に納め相馬郡司に任じられた後、再度相馬御厨を伊勢神宮に寄進、源義朝と主従関係を結び、義朝を上級領主とし、「保元の乱」に際しては上総介広常と共に義朝方へ参陣して、義朝を領家とした相馬御厨の下司職を確保したらしい。

その後も、佐竹氏の系統である源義宗などと、相馬御厨の支配をめぐって争われたが、結局千葉常胤が相馬御厨の支配権を握り、それは子の相馬次郎師常に引き継がれた。

相馬御厨は、東は利根町の蛟蜩（みつち）神社、西は常総市の菅生沼、南は柏市の手賀沼周辺、北の境はつくばみらい市を流れる衣河（現在の小貝川）がおおよその範囲とされている。その四至南限に「志子田谷」とあり、篠籠田附近が相馬御厨にかろうじて含まれたようである。

江戸時代、篠籠田村となって、村明細帳では、元禄15年の検地に家六九、人数322とある。今回、西光院の境内を散策したが、西光院の概略は以下の通り。

名称（宗派）	報恩山　無量寺 西光院　（真言宗豊山派）
創建	不明（榊住職によれば室町末期・戦国～江戸初期とのこと）
本尊	阿弥陀如来
特記事項	境内に石仏多数（延宝年間の地蔵、十九夜観音等）。三匹獅子舞が行なわれるので有名。

＊ 篠籠田の三匹獅子舞　・・・千葉県指定文化財（無形文化財）

篠籠田の獅子舞は、元禄の頃から雨乞いのために始まったといわれる行事。毎年、西光院の施餓鬼の日に行なわれてきた。舞いは五穀豊穣と家内安全を祈願し、西光院の境内に立てられた、四方の竹の中で演じられる。四隅には花笠を持った若者が立ち、引きたて役はひょっとこ・きつね・猿がからみ、単調なリズムの中で華やかに舞う。入場→「猿舞」→「女獅子」→「中獅子」→「大獅子」→「精進返し」と進み、最後に和歌を詠じて退場。　昭和50年（1975年）12月12日に千葉県の無形民俗文化財に指定された。

なお、今回まわらなかったが、地主神社という古い神社がある。

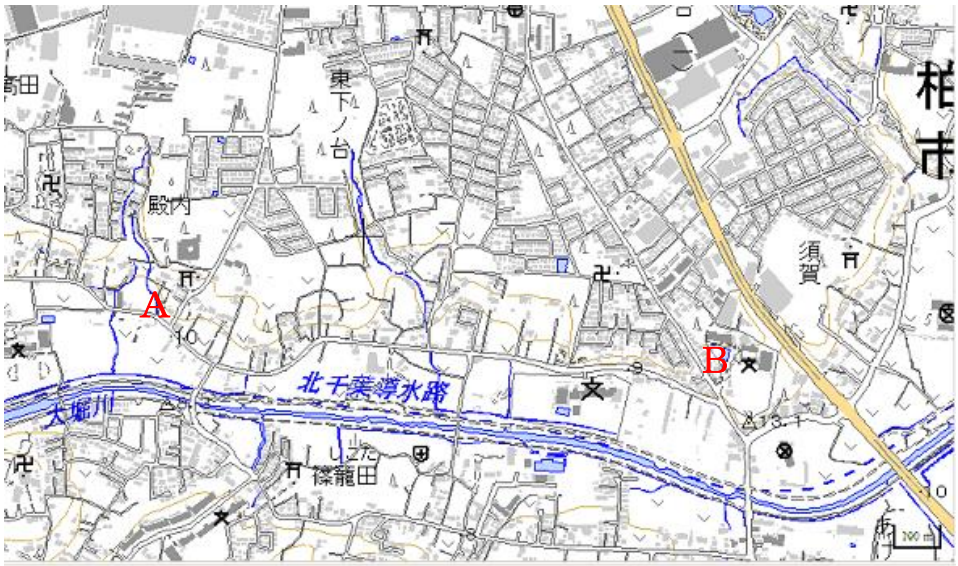
天平６年（762）奈良中期の創建というが、不詳。板碑で、文永１１年（1274）という鎌倉時代の年号がはいったものを所蔵している。

３．中世武士の拠点であった高田

高田の集落がいつ出来たかは不明であるが、隣接する篠籠田が平安時代からの記録をもつことから、相当前にさかのぼると思われる。

当地の旧家山崎家の伝承では、平重盛の子孫である平氏利が山崎家の先祖といい、熊野神社も山崎家が開創したと伝える。しかし、その年代は天正年間とされるが、高田からも鎌倉時代の板碑が出土しており、250年間のギャップがある。

室町時代の応永年間には、千葉氏一族の匝瑳氏が当地に来て、以後戦国時代半ばの1530年頃までは高田を支配していたことは、各種の文書（香取神宮文書、本土寺過去帳）からも明らかである。【本土寺過去帳資料参照】



匝瑳氏の城の比定地　　立地からみれば、Ｂの方が城として相応しい場所（Ａは館跡か）

Ａ　熊野神社附近：「殿内」という字名。大正時代までは遺構があったらしい

Ｂ　柏四小附近：　「町田台」という字名。かつては遺構（土塁、堀、井戸郭）があったが、現在はなし

匝瑳氏は千葉常兼の子八郎常広を祖先とした一族で、名字の地は匝瑳郡である。室町時代の応永年間頃までは高田ではなく、現在の香取郡多古町辺りに居住していたのが、千葉氏宗家が傍系の馬加康胤、重臣の原胤房らによって滅ぼされた後、高田に移転し、元の千葉氏宗家である武蔵千葉氏や関東管領上杉氏に従って境根原合戦など、各地を転戦した。

一方、対立する下総千葉氏、古河公方の側は、原氏、高城氏など東葛地方に大きな勢力を振るうようになり、その圧迫のためか、1530年頃を境として匝瑳氏は現在の埼玉県三郷市に移転、戦国末期には小田原北条氏の陣営に加わった。

４．高田の野馬土手

高田には、小金牧の「高田台牧」があったが、下図のように、今も一部の野馬土手は残存している。

柏市域の牧の範囲を示す図（左）と高田附近の拡大図（右）。
右の図にある線は残存する高田台牧の野馬土手。高田附近では、大堀川を境に高田台牧と上野牧が隣り合っていた。

高田台牧の遺構は、十余二の高田原ふるさと会館の裏手に野馬土手が十メートルほどは残っているほか、流通経済大学附属柏高校のグラウンド裏手にも大規模な野馬土手と堀が残っているものの、柏の葉の市街化やそれに先立つ柏陸軍飛行場の建設などで消滅したか、残存していても改変されている場合が多い。

高田の野馬土手は、西側流山市の成顕寺のほうから断続的に続いており、北へ湾曲して聖徳寺の裏手を通り、聖徳寺からは南下して東へ熊野神社の裏手に出る。熊野神社裏手の土手はかなり低くなっているが、残存しており、それは道路を越えて、東側の山林へと続き、野鳥公園の南側の道沿いにも、明確な土手として数十メートルが残存している。その先には、浄土宗の浄善寺が堂宇のみ残っているが、野鳥公園の中の和尚溜という池は名前からして浄善寺の和尚に関係ありそうである。

野鳥公園を越えると、市街地と畑が広がるが、浄土真宗の満徳寺の手前の旧家の屋敷森との境の道沿い（一部は駐車場になっている）に野馬土手が残っている。これは柏市の文化財地図には、途中でカギ状になり、南の低地に降りる道沿いの土手につながっていることになっているが、南下する土手は見つからず、既に撤去されたように思われる。

今回、実際にまわったのは熊野神社裏から浄善寺跡附近であるが、十分に野馬土手の続く様子が確認できた。

５．うなぎ道（諏訪道）

江戸時代から、利根川の布施河岸から松ヶ崎、高田を通り、現在の流山市の江戸川沿いの加村河岸まで、うなぎを陸送した道である。

左は、現在の水切り場跡。
何の変哲もない交差点になっているが、写真右側向うの角の店附近に湧水があり、その辺が水切り場であった。

なお、近くには屋号が「水切り場」という家が今もある。

これは、印西の平塚河岸から白井を通り、松戸にいたる鮮魚（なま）街道とともに、江戸時代からの重要な物資(主に鮮魚)の輸送路で大江戸の台所を潤した。鬼怒川や小貝川上流から運ばれてきた穀物、さらに利根川の沼地でとれたうなぎや鮭などは、布施河岸で荷馬に乗せて15Kmの陸路を約４時間で流山の加村河岸に運んだ。加村河岸からは江戸川の舟運で江戸へ送った。

このうなぎ道は布施からは、須賀神社の近くを通り、松ヶ崎の一本杉を抜けて、高田にいたる。高田から豊四季の諏訪神社の辺りを抜けて、流山の加村まで行く訳である。

その加村までの途中にあった休憩場が、高田の水切り場で、うなぎを生簀にはなして生き返らせるとともに、荷馬を休めた。

手賀沼の特産物はうなぎのような魚介類や水鳥などで、特に手賀沼で捕れるうなぎは、色が黒く、肉質が繊細で焼いても身が縮 まず脂ものっているため、昔から「あお」とか「黒鰻」としてと呼ばれて珍重された。そのうなぎを江戸まで生きたまま運ぶためには、陸送している間も何度かうなぎを水につける必要があり、それで水切り場のような工夫がされた。

なお、この街道は諏訪神社への参詣者が往来する道でもあったため、諏訪道とも呼ばれる。

その当時、江戸時代から明治頃の輸送手段は、馬であったが、沿道には馬頭観音も残る。それは弊馬を葬った場所であり、柏五中前には馬頭観音が固まって存在する。中に「徴発」と刻まれた、明治20年代の軍馬の観音塔がある。これは軍に徴発された馬の死を悼んだ元の飼い主が建てたものだろうが、そこまで明確に意思を表示するのも珍しい。

６．石仏

今回、篠籠田の西光院など石仏が豊富に存在する場所を見学した。信仰の対象というだけでなく、石の芸術品として眼福を感じるものがある。多数あるのだが、そのなかでも特筆すべきものを写真とともに紹介する。

延宝２年(1674)の十九夜塔（西光院）
極めて古い十九夜塔で、百人を超える講の人数の頭に「男女」の文字あり、当時は男性も十九夜講に加わっていたことがわかり、貴重である。

延宝９年(1681)の如意輪観音（西光院）

延宝５年(1677)　弁財天.（松ヶ崎香取神社）

「房総の石仏百選」に掲載

質問事項などに関する補足

１．篠籠田の八幡（はちまん）地名

。

篠籠田の八幡地名について、ご質問があった。一般的に八幡(はちまん)という地名、八幡(やわた)と言う場合もあるが、これは八幡神社あるいは八幡宮のあった場所が多い（たとえば、市川に本八幡という地名は葛飾八幡宮に由来)。

松ヶ崎にも八幡という地名がある。明治期には、八幡神社というほどの大きさかどうかさだかでないが、八幡神が祀られており、明治期の陸軍迅速測図にも記載されている。篠籠田についてはその地図には記載がないが、隣接する豊四季に八幡山（やわたやま）という字名がある。篠籠田の八幡という字名、さらに隣に豊四季の八幡山という字名があることで、やはり八幡神社があったのではないかと思われる。現在も豊四季には八幡神社があるが、これは南柏駅近くの旧水戸街道にほど近い場所にあって、かなり所在地が離れているので、それが移って行ったのかどうかは不明。明治以前の江戸時代の地図や、村の明細帳などに記載があれば裏付けが取れると思われる。ちなみに、実際に篠籠田の周りの人に聞いてみたところ、今や八幡という字名を知っている人自体が少なくなっていたのに、あらためて驚かされた。

２．地主神社の祭神

地主神社の祭神について、ご質問に対して後日回答した内容であるが、まず地主神社は篠籠田村の鎮守で、祭神は大物主命である。大物主命は大国主命と同じ神であり、呼び方が違っているだけである。これは、俗にいう大国様であり、地主神社には大国様が祀られているということになる。そして、ここにも結構立派な富士塚がある。

この地主神社の創建は不明であるが、古代篠籠田が集落として成立した頃とすれば、11 世紀初頭ぐらいに遡るかもしれない。興味深いのは、鎌倉時代の文永 11 年(1274)の銘のある板碑がここから見つかり、所蔵されていることである。これは旧沼南町が合併する以前は、柏で最古の板碑であった。しかし、旧沼南町の大井にもう少し古い板碑があったため、1 位の座は奪われてしまったが、非常に古い板碑であることは間違いない。

３．松ヶ崎香取神社の庚申塔

松ヶ崎香取神社の庚申塔が百庚申かどうかの件、百庚申と言えばその通りであるが、もともと百庚申をつくるために庚申塔を建てていったわけでなくて、松ヶ崎香取神社に近隣の庚申塔を集めていったら結果的に百庚申になったのではないかと思われる。初めから意図して百庚申にしようと思って、大量に庚申塔をつくる場合もあるようであるが、1 個 1 個の年代を見るとそれぞれ違っており、後付けで百庚申にしたのではないかと思われる。

なお、この場所には宝永 3 年(1706)の青面金剛の像塔があるが、松戸、柏、鎌ヶ谷に二十

基ほどの同じ作者とみられる技巧的には稚拙ながら、修験者らしき目玉の大きな人物像を活写したユニークな庚申塔の一つである。これは、松戸の古ヶ崎にある元禄時代のものなどと同様に、頭巾のようなものをかぶり、二手で合掌する姿である。しかし、残念ながら、顔面が磨滅しており、作者とは筆跡の異なる文字の追刻もあって、原形が損なわれている。

４．当地の豪族の檀那寺について

前述の通り、戦国時代初めには高田に匝瑳氏が来て、周辺を統治していた。その匝瑳氏は現在の匝瑳市（八日市場あたり）または多古町などを本拠にしていたようであるが、享徳の大乱のおり、関東管領上杉氏についた千葉氏宗家が古河公方を支持する傍系の馬加氏に乗っ取られ、馬加系千葉氏が下総守護、千葉介となり、元の千葉氏宗家の系統が武蔵国に逃れ、武蔵千葉氏となると、武蔵千葉氏の側の豪族として元の領地を失い、もともと応永年間以前から領していた高田に移住したようである。その匝瑳氏は武蔵千葉氏およびそれを後援する関東管領上杉氏と下総の馬加系千葉氏との戦いに従軍し、文明 10 年(1478)の境根原合戦で匝瑳勘解由などの一族が戦死している。

その匝瑳氏はもともと日蓮宗であった。高田には、真言宗豊山派の聖徳寺や浄土宗の浄善寺があったが、現在日蓮宗の寺院はなく、戦国時代でも高田に日蓮宗の寺はなかったようで、匝瑳氏は高田にあって、檀那寺を北小金の本土寺にしていた。本土寺は馬加系千葉氏が千葉介となってからも、武蔵千葉氏を本家とみていたようで、そういう立場の本土寺からみて、同じ陣営の匝瑳氏は大檀那であった。

一方、高田に匝瑳氏がいた時期には、戸張には相馬氏の流れをくむ戸張氏がいた。享徳の大乱の頃、戸張氏も関東管領上杉氏の側についていた。その戸張には、戦国時代には曹洞宗の長全寺という寺があった。今は柏のほうの町中、ちょうどアミュゼ柏の南側に移っており、近くには長全寺通りと言う繁華街もある。それが、いつ移動したのかは、長全寺の記録にも残っていて、寛永年間と言うから江戸時代の初めになる。もととも戸張にあった長全寺は、

戸張氏が檀家でいたのであるが、1500 年代半ばには現在の埼玉県の吉川のほうに移動したので、長全寺自体は一時衰退した。しかし柏の町が、水戸街道が整備されていくのに伴い人口が多くなってきたということで、町場が形成され、そのため寺が必要となり、持って来られたのだろうと思われる。

ちなみに松ヶ崎の万松寺という曹洞宗の寺は、この長全寺の末寺にあたる。

戸張氏は地元の戸張に檀那寺をもっていたのに対し、匝瑳氏が高田に檀那寺をもたなかったのは、その豪族の出身が地元であったか、移住してきたかの差といえよう。